

従来の防疫方法がワクチン接種に変更され1960年代以降牛を対象としたワクチン接種が一般化したことにより発生が激減し、1990年代初までにワクチン接種を中止し撲滅を達成した国が続出した。一方、ワクチン接種の中止と経済統合による人の交流・物の流通の自由化により、一旦侵入するとまん延しやすい状況ができあがり、2001年の英国などにおける大流行につながった。

南米では、19世紀半ばにヨーロッパからの種畜の輸入により口蹄疫が侵入し、定着していたが、1990年代初めまでにワクチン接種により発生がなくなり、一部の国・地域（アルゼンチン、ブラジル南部地域、パラグアイ、ウルグアイ）では、ワクチン接種が中止された。しかし、1990年代末の世界の口蹄疫の発生の増加により侵入リスクが高まる中で、2000年代初頭に口蹄疫の発生をゆるし、その後ワクチン接種を復活している。

アジアでは、ほとんどの国で流行し、特に牛を役畜として農業に使用する東南アジアでは口蹄疫の感染により役畜としての能力が失われることから大きな被害を与えてきた歴史がある。台湾・韓国は長らく清浄であったが、1997年に台湾で発生し輸出産業としての養豚業は破滅した。韓国では2002年および2011年に発生し、2011年には感染が韓国全土に広がったことから、全国的なワク

チン接種に踏み切った。一方、フィリピンおよびインドネシアは、防疫政策が効を奏し、それぞれ2011年および1996年以降清浄国となっている。日本では、2000年に92年ぶりに宮崎県および北海道の4農場で発生があったほか、2010年に宮崎県で297農場で発生し、30万頭近くの牛・豚が殺処分された。

このように、口蹄疫の世界の状況をみると、ほとんどの国で今だ発生しているか、清浄化が達成されていない中で、①新興国における畜産の大規模化、②人の国際交流の増加、③人と野生動物の接触の増大、④動物・畜産物の国際取引の増大、④清浄国における口蹄疫ワクチン接種の中止などにより、清浄国においても侵入し、一旦侵入すると大流行を招きやすい状況となっている。また、発生すると大量の家畜の殺処分により大きな被害を生じるだけでなく、発生地域における移動制限と殺処分により動物福祉上の問題や人・物流の制限による観光産業への影響の問題も生じる。2011年に牛疫が世界から撲滅されて以降、途上国も含めた口蹄疫ステータスの改善に向けて国際機関などが中心となり国際的な協力の取組みが強化されている。

(平成24年12月例会)

伊澤信平と歯科医術

——ハーバード大学に留学した蘭軒の孫——

樋口 輝雄

明治中期から大正初年にかけて本邦歯科界で指導的立場にあった伊澤信平は、江戸後期の考証医家として名高い蘭軒伊澤信恬の孫である。蘭軒とその末裔の事績は、鷗外森林太郎の史伝『伊澤蘭軒』に詳しい。史伝は大阪毎日新聞、東京日日新聞に大正5年(1916)6月より翌6年9月の間、371回にわたり連載されたが、その後半は蘭軒没後の文政12年から大正6年まで約90年間の後裔ならば

に門人を叙述する。子孫のことは蘭軒および杉田玄白の曾孫伊澤徳(いざわ・めぐむ、1859-1944)が供した資料によるが、鷗外は『伊澤蘭軒』の冒頭で、伊澤家には蘭軒の高祖父・有信が興した「宗家」、宗家四世信階が分立し子の蘭軒が継いだ「分家」、蘭軒の子柏軒信道が分立した「又分家」があると述べ、宗家は麻布鳥居坂町の信平、分家は牛込市ケ谷富久町に居住する徳、又分家は赤坂

氷川町に寓する信治が当主だと家譜を記すが、東京麻布の永平寺別院・長谷寺に伊澤三家の墓所がある。

伊澤信平は万延元年(1860)2月、又分家・柏軒の三男として生まれた。幼名は平三郎で鷗外に長ずること2年である。明治6年に宗家七世の伊澤道盛の養子となり、東京大学医学部に入学して予科から本科に進むが途中で退学した。その間の経緯は明らかでないが、明治13年・14年度の『東京大学医学部一覽』には四等予科甲生の欄に伊澤信平、別課医学第三期生に伊澤徳の名がある。宗家は筑前黒田藩の口中医を務め麻布鳥居坂に住した。養父の道盛信崇は幕末期に「漢法口歯科」を以て開業したが、明治10年頃津田仙の紹介で「洋法歯科の開祖」小幡英之助から近代歯科医学を学ぶ。同13年に内務省免許を下附されたが、それ以前の11年に銀座の「津田繩売捌所」で出張診療を行っている。のち信平は名倉納に師事し、Flagg, JFの“Quiz questions, course on dental pathology and therapeutics, 1882.”を明治20年『記憶捷歯科問答』の書名で訳出刊行した。翌年に渡米してハーバード大学歯科に留学、3年の課程を卒えDMD (Dentariae Medicinae Doctor) のdegreeを授与された。アメリカでは19世紀初頭から歯科医学・歯科医療が独自の発展を遂げた。そして19世紀中葉には顎顔面領域の解剖学と口腔内疾患の病理病因論を根拠とし、歯科治療用に特化した器械器具・修復材料の開発により近代歯科医学が著明に興隆した。江戸時代の我が国では東洋医学を基とした「口歯科」「口中科」が標榜されていたが、各流派の方技は謂わば秘伝のまま衰微し、幕末から明治初期には来日したアメリカ人歯科医により叙上の近代歯科医学が日本人に伝習された。ハーバード大学卒業後ドイツでコッホに学んだ信平は明治25年に帰朝する。歯科界での業績については、日本歯科医史学会前理事長・故谷津三雄先生が、第二回日本医学会で講演や明治29年に日本初の亜酸化窒素(笑気ガス)による吸入麻酔の公開実験を行ったことなどを論述されている。帰

国後信平は月刊の学術誌『歯科攻究彙報』を主宰し、明治26年(1893)4月開催の第二回日本医学学会では5日目の4月8日、「歯科医術」と題し講演した。歯科の特殊性と近代歯科医学の発達史を述べ、歯科教育機関・歯科病院の設立と口腔外科学・口腔病理学の必修化が喫緊の課題であると強調する。その後医術開業試験委員、宮内省侍医局御用掛、日本歯科医学会会長、日本歯科講義会講師、共立歯科医学校(日本歯科医学専門学校)顧問などを歴任した。

鷗外は『伊澤蘭軒』「その三百六十八」で、「今茲大正六年に東大久保にある伊澤分家では徳五十九……、赤坂氷川町清水氏寓伊澤又分家では信治二十一、……麻布鳥居坂の宗家を継いだ叔父信平五十七である」と記す。大正6年(1917)から40余年を経た1961年、柴田光彦氏は蘭軒の子孫を再調査された。岩波書店版『鷗外全集』未収録の伊澤徳宛書簡を早稲田大学図書館が収蔵したことを機に纏められた論考『鷗外の書簡、「伊澤蘭軒」伝執筆の為の伊澤徳への問合せ』では伊澤三家の詳細な系図を掲出している。また2002年には町泉寿郎氏が『伊澤蘭軒とその一族の遺墨』で子孫たちの伝存する書幅類を紹介された。

宗家八世の信平は大正5年に脳血管障害に仆れ、一時軽快するが翌6年4月宿痼再発、連載中の『伊澤蘭軒』に應えることも能わず4年間病床にあり、言語歩行も困難なまま大正10年(1921)6月12日没した。6月14日菩提寺長谷寺で行われた葬儀につき「多数名士の参列あり歯科界稀有の盛儀なり」と『歯科新報』誌は伝える。子息らは父祖の医業でなく、各々実業界や教育界等に進んだ。柏軒を祖とする「又分家」の継嗣・伊澤信治氏は信平の実子で昭和55年に82歳で卒去した。同家当代は蘭軒男系の玄孫で、信平の令孫にあたる信臣氏(昭和17年生)である。演者は1996年より知遇を得、今回の合同例会には伊澤信臣・しのぶ様ご夫妻に出席いただいた。茲に鷗外に倣い蘭軒末葉の方々の健康を祝したい。

(平成24年12月例会)